

令和元年度「不登校に関する研修会」(第5回) 講義記録

- 1 日 時 令和元年11月8日(金) 14:00~15:40
- 2 会 場 洲本市文化体育館
- 3 講 師 神戸大学大学院 齊藤 誠一 准教授
- 4 テーマ 思春期の発達的特徴を踏まえた不登校支援のあり方
- 5 内 容
 - (1) エピソード1~4について
 - ・ 小学校では当たり前でも中学校では禁止されていることがある。
 - ・ LINEによるトラブルが最近、非常に増えてきている。
 - ・ 保護者の多くは、不登校を受け入れられない。始期は叱りつけることが多い。
 - ・ 教師が使う「がんばれ」という言葉ほど罪作りな言葉はない。子どもの立場からすると何をどうがんばったらいいいのかわからない。
 - ・ たとえ教師に悪意がなくても、親にとっては重たい言葉に受け取られる場合がある。
 - ・ 「一緒にできることからやってみよう」「○○しましょう」という呼びかけで終わるとよい。
 - (2) 児童期と思春期の発達的特徴
 - ①発達の概観
 - ・ 児童期になると幼児期とは異なり、具体物があれば論理的思考ができるようになる(例: つるかめ算などの文章題)。友人関係が広がり、5~10人で集まって過ごすようになり、昔であれば秘密基地を作ることもあったが、現在は遊びの形態が多様である。
 - ・ 思春期になると、具体物がなくても論理的思考ができるようになる(例: みかんやりんごはxやyになって、方程式を用いる)。先生の前では廊下を歩いても、先生がいないところでは廊下を走るなどちょっとした罪の意識とドキドキ感を楽しむようになる。「むかつく」が口癖になるような苛立ちを感じたり、これまで経験したことのない身体的変化に戸惑ったりする。
 - ・ 身体的変化により、自分への注目が生じたり、他人との違いに気づいたりすることで、自我の覚醒が生じる。
 - ②反抗の意義
 - ・ 第二反抗期では、大人の言うことに疑問を感じ、大人がそれまでのような権威的存在ではなくなる。例えば、「夕方5時までに帰りなさい」と言われ、「なぜ5時1分や2分ではいけないのか」という疑問に答えられる保護者がいない。そうした根拠のない言いつけを守る意味が感じられなくなる。
 - ・ 中学生になると、子どもとしての扱いから大人としての扱いに突然変わることに戸惑う。例えば、小学校を卒業してほんの数週間後には、決められた髪型で決められた制服で登校しなければいけなくなる。小学生の時は「子どものくせに・・・」と言われていたのに、中学生になると「もう子どもじゃないんだから・・・」と言われるようになる。しかし、大人扱いをされても、バイクに乗ったり飲酒したりすることは許されない中途半端な状態にあり、子どもでも大人でもない境界人という存在になり、心理的な不安定さを特徴としてもつ。
 - ・ こうした不安定さを解消する方法として、自分たちの年代にしか通用しない青年文化を受け入れることになり、大人目から否定的であることが重要である。例えば、ルーズソックスやボンタンズボンが大人になって着用することがないの

もこのためであり、ある意味自分たちに存在をアピールするものであるといえる。

③ 脳発達の観点から

- ・ 脳は25歳前後に完成すると言われており、思春期ではあまり使われていないシナプスの結合は除去され(刈り込み)、重要な神経細胞の軸索が髄鞘化され、情報の伝達速度が向上する。
- ・ 前頭前野は理性(ブレーキ)を司るが、他の部分に比べて発達が遅いため、衝動性が高まり(アクセルは踏めても)、それをおさえることができない(ブレーキが踏めない)状態になることが多い。たとえば、わざわざ高い塀の上を歩いたり、自転車の3人乗りをしたりしてスリルを楽しむのも、この例といえる。
- ・ 扁桃体は感情をコントロールする上で重要な役割をもつ。子どもの頃の虐待経験は脳に大きな影響をもたらし、扁桃体が敏感に反応しやすくなるため、感情のコントロールがうまくできなくなることがある。
- ・ ゲームで高得点を取り、うれしい気持ちになると、脳内伝達物質のドーパミンが分泌され、快感情を生起させる。これが繰り返されると、ゲームを見ただけでもドーパミンが分泌され、快感情を生じ、ゲームがないといられなくなる依存状態になる。さらには、これが続くと、より強い刺激がないとドーパミンが分泌されなくなり、脳に大きな負担をかけることになる。

(2) 不登校対応をめぐる諸問題

① 過剰適応型児童生徒

- ・ 何事もきちんとできないと気が済まないタイプの、いわゆる“良い子”と評される子どもたちである。
- ・ 自分が周囲から期待されていることを自覚している。
- ・ 周囲がいくら「大丈夫」と言っても、受け入れられない。その結果、無理を繰り返してしまう。最終的に、自分の評価を下げることから避けることで自分を守ろうとするので不登校に繋がる。

② 不登校をめぐるキーワード

- ・ 朝、登校を渋る子どもに対しても「それほどしんどいのなら、今日は学校に行かなくてもいい」と言うことは、いわゆるカウンセリングではOKであるが、認知行動療法ではNGであり、登校を促進する刺激を与えることが必要となる。どちらがいい悪いではなく、登校刺激も治療法によって意味が異なることを知り、この子どもにはどちらが有効であるかを考えて判断すべきである。
- ・ 毎朝の学校への欠席連絡は、学校にとっては子どもの所在と安全を確認する上で必要であるが、これ自体が親子にとって大きなストレスになっていることも知るべきであろう。
- ・ 熱心な家庭訪問がストレスになる場合もある。例えば、毎日のように教師が家に来たら、どのように感じるか、あるいは近所の目が気にならないか。繰り返し家庭訪問を受ける保護者や子どもの視点からも考えるべきでないだろうか。
- ・ 発達障害の子は、ちょっとした変化に臨機応変な行動をとれなかったり、ちょっとしたことが気になったりして学習に集中できなくなったりすることがあるが、「わがままである」「やる気がない」などと決めつけて、不登校に繋がる不適応状態にしてはいけない。
- ・ 保護者の中には、別室や適応指導教室のような特別な場所に行ってはいけないという思いを持っている人もある。特別な場所で特別な対応をしてもらうことに慣れると、通常の学校生活に戻れなくなるという誤解がある。
- ・ 心理的支援をするのは、SCでも外部機関のカウンセラーでも構わない。SCなら別室登校した時に話もできるし、学校に来ることができない子なら抵抗感の少ない適応支援教室や教育センターの相談室など外部機関なら行くこともできるかもしれない。大事なことは、その子にとって両者のメリットをうまく活用することである。

(3) 保護者へのかかわり方

- 学校はここまでやったので後はお願いしますというスタンスではいけない。保護者を見捨てることなく、これから一緒にやってみようというメッセージを伝え続けてほしい。
- 健康寿命（身辺自立が難しくなる年齢）を考えると、多くの保護者にとっては、我が子のことだけでなく自分の親の世話も併せて考えなくてはならない年齢になっており、保護者の大変さを理解することが大切である。
- 教師が良かれと思って発した言葉や対応が、保護者にとって大きなストレスになる場合がある。例えば、先生は「何かあればお電話ください」とよく言うが、実際に学校に電話をかけても繋がらないことが多い。授業や部活動があるのだから当然である。ただ、保護者にとっては肩すかしという感じになってしまう場合があることを気に留めてほしい。